

「自己エスノグラフィという記述方法」

山田瑞紀 (Mizuki YAMADA)

千葉大学大学院人文公共学府

目的

本発表では、自己エスノグラフィ (Auto-ethnography) という記述方法は、記述された体験を当事者がどのように体験したのかを重視する、すなわち「探求の方法」(Richardson, 2000=2006, p.315, p.324) の特徴を持つことを述べる目的がある。言い換えると、この記述では、当事者が現在を現在のように認識しているのには、ある体験をどのように捉えているためかという当事者の意味づけの明示を目的とする。そのような記述は当事者自身が自分の体験を認識していく機会を作っていくとともに、その記述の読者を当事者のリアリティへと(当事者がどのように出来事を体験したのかの追体験に) 誘ってくれる。この記述が特徴とする体験の意味づけの重視は、これまでの客観性や実証性(体験は本当か、類似したことが起きるか)を前提とした知識のあり方では見落とされやすかった。だが、意味づけを重視する観点は、これまでの知識の基準では一元化されてきた対象の多元的な姿を示唆し、その対象の知識を更新するきっかけをつくと期待する。

記述方法と形式

自己エスノグラフィとは、個人に内面化された文化的要素を理解するために、個人的な体験を語り、個人とそれを取り巻く文化の結びつきを明らかにしていく記述方法である (Ellis et al, 2011)。具体的には自己エスノグラフィとは、調査者自身が過去の自分の体験を想起し一人称の自分を表現することで、自分や周囲の他者、そして自分や他者をそのように成立させる文化的、社会的な文脈を記述している。体験の想起は、感情を中心としてなされる。なぜなら語り手のジェンダー、国籍、生まれや育ち、社会的地位、障害や疾患の有無、セクシュアリティなどの体験を語る際には感情が生じてしまう (岡原、2019, p.64)。それ故に感情は体験を想起する媒介となりやすい。これらの対象は、客観的であることを重視する知識によって一元的に捉えられてきた背景を持つ。そのような背景のために上記の対象は自己エスノグラフィの対象となりやすい。

その記述の形式は、人間の主観的で感情的な経験の生き生きとした表現の模索を始めとした多様な目的や言語で表現し切れることの不確かさなどを理由にし、実験的で自由な形式をしている。それらの記述は、回想録やライフストーリー、エッセイ、そして自己エスノグラフィであるなどと様々に読まれ、捉えられる。このような記述の形式の曖昧さは自己エスノグラフィの主たる批判になっている。だが、これらの記述のあり方を批判する批判の仕方自体が、読み手のこれまでの体験の表明になり自己エスノグラフィの記述に取り込まれ、次の記述を生み出す機会をつくる (Ellis & Bochner, 2000 = 2006

p.148) という利点になる。

探求的自己エスノグラフィにおける記述の特徴は、体験を意味付けていく過程と結果が切り離して成立しえないことである。そのような形式は、調査者が対象と「距離をとれない」し「距離をとりたくない」(岡原、2014、pp.75-76) ことを重視し、その体験をそのまま記述しようとすることでリアリティや意味づけを表現するという方法を模索している。その模索の意味は、リアリティのある記述を通して感情を触発された読者もまた自己の感情を想起していくことを意図しているためである(岡原、2014)(Richardson, 2000 = 2006)。リアリティや意味づけの重視は「読者がより想像しやすく、より接近しやすく、より感情的に捉えられることができる表現」を探すことにつながる(岡原、2014、p.78)。

応用の可能性

上記してきた探求的自己エスノグラフィの方法は、従来「当事者には語れない」とされていたトラウマを当事者自身が記述する方法として応用できる可能性を持つ。それは認識できていない体験に感情を通して近づくことで周辺の出来事を想起する方法である。現にトラウマの代名詞として語られる、その当時の恐怖に立ち戻ってしまうフラッシュバックがトラウマを負った当時の意味付けできない感情を起点にしていること(Herman,1992,pp.45-46=1999、pp.66-67) や、トラウマの治療方法として当時の体験の意味付けをし直すことが求められる点(Van der kolk eds.1996=2001、p.476) があげられる。これらのトラウマにおける感情や意味づけの重視が探求的自己エスノグラフィのこの対象における有用性を物語っているのではなかろうか。

参考文献

- Elis,C & Adams,T E.& Bochner,A P., “Autoethnography: An Overview,Forum,Qualitative,”
Social Research, 12(1) (2011) <http://www.qualitative-research.net/index.php/fqs/article/view/1589/3095> (Retrieved march 31,2018).
- Ellis,C & Bochner,A P.,”Autoethnography,Personal Narrative,Reflexivity: Research as Subject,”N.K.Denzin,& Y.S.Lincoln, eds.,*The Handbook of Qualitative Research(2nd ed)*,(Sage Publication, 2000),(藤原顕訳「自己エスノグラフィー・個人的語り・再帰性：研究対象としての研究者」平山満義監訳『質的研究ハンドブック 3— 質的研究資料の収集と解釈』(北大路書店, 2006) pp.129-164.
- 岡原正幸「喘息児としての私：感情をいきもどすオートエスノグラフィー」岡原正幸編『感情を生きる パフォーマティブ社会学へ』慶応義塾大学出版界、2014、pp.75-123.
- 「身体性と感情公共性 脱感情資本主義の実戦へ」乾敏朗、佐藤友亮『談 感情身体論』水曜社、114号、2019.
- Richardson,L, “*Writing: A Method of Inquiry*,”N.K.Denzin,& Y.S.Lincoln eds., *The Handbook of Qualitative Research(2nd ed)*,(Sage Publication, 2000),(藤原顕訳「書く：ひとつの探求方法」平山満義監訳『質的研究ハンドブック 3— 質的研究資料の収集と解釈』北大路書店、2006) pp.315-342.
- Van der kolk,B A. & Mcfarlane, A & Weiseth, L eds., *Traumatic Stress: The Effects of Overwhelming Experience on Mind, Body and Society*;(The Guilford Press ,1996),(西澤哲監訳、『トラウマティック・ストレス-PTSD とおよびトラウマ反応の臨床と研究のすべて』誠心書房、2001)
- Herman,J *Trauma and Recovery the Aftermath of Violence: from Domestic Abuse to Political Terror* (Basic books,1992) ,(中井久夫訳『心的外傷と回復』増強版 みすず書房、1999)